
S & H 青い鳥

おとぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S & H 青い鳥

【Zコード】

N3496B

【作者名】

おとぎわ

【あらすじ】

主人公の琴吹祭がドタバタと回りに振り回されていくストーリーです。

始まりは唐突に？

拝啓 母さんへ

四月になり、桜の季節がまたやつてきましたね。
俺は元気でやつてます。

昨年は何事もなく、無事一年生に進級できました。
母さんも仕事が大変ですね？体調管理も気を付けて下さい。
天国の父さんも向こうで元気よくしててるかな？

だつたらいいな。

仕送だけでなく、たまには顔を見せてくれるとあんしんできます。
さう

近日、引っ越したはずの菜之花さんの家がまた帰ってくるんだって！

祭より

「ふう～、こんな感じでいいかな」

始めて

琴吹 祭といいます。

灯丘高校一年の男子高校生です。

明日から新学期が始まることで昨年の報告を兼ねて、母さんに手紙を書いていたところです。

「ふあ～～～」

大きな欠伸がでた。

一段落着いたし眠くなってきたかな……

まだ春とはこえ、寒いし

おやすみなせー……

ブ、ブ、ブブブブ

ブ、ブ、ブブブブ

ん?「うるせこな。

机の上にある携帯を見るとランプが点滅していた。

電話か、誰からだ?

手に取つて開いてみると

『みや美ハ』と画面には表示されていた。

「もしもし」

「やつほ~ 祭

なんか暇な声ね

そうね 今からこの私が行つて上げるわ
喜びなさい泣きなさい 歓喜を上げなさい

「いや、ちゅつ 今日は」

ツ ツ ツ

あ、ありやがつた……

。 たつた今電話を切つた奴は昔からの幼馴染みで、名は「友井 美八」^{ともい みや}

かの有名な友井財閥の「令嬢」で、
どうして知り合つたのかは……すみません 忘れました。
男勝りな性格なうえに、何かとよく俺に絡んで来る。

ドン ドン ドン

噂をすればなんとやう…… 早速やつて来たらしい。

家にはチャイムと黒板のあるの

ドン ドン

「今すぐ行くよ」

ガチャ

ドアを開ければ、やはり みやが立っていた。

「あら 『機嫌用 祭』

途端何もいわず、すかすかと家に入り込んできた。

なんだ？急に

「ちよつとじつしたんだよ」

慌てて後を追うと
みやはすでにソファーでくつろいでおり、煎餅を食べながらテレビ
を眺めていた。

「祭 お茶」

「はあ？」

「だ・か・ら お茶」

家に来たと思ったたら、すぐ これだからな
お嬢さんの考えている」とは理解できん
とか

考えてつつも、しつかりお茶を準備している俺つて立場弱

「あいよ」

湯飲みに入ったお茶を近くのテーブルに置いてやる

みやはそれを手にとり、飲み干すと
つて、それ、かなり熱いはずなんですか??

「祭 優のこと覚えてる?」

美八はテレビを覗いていたと思つたが、急いで机に向けて座
つていた

「まあな 古い付き合いだつたしな
今度またこちらに引越してくるんだろ?」

また、優に会えるなら嬉しいな
急に引っ越したから、御別れの挨拶もしていないし…

「そうね 彼……

まあいいわ 今田 一からに来る」とになつてゐるから

ん?祐が家に来るつてことか?

「久しぶりに会つな~

あいつ かつて良くなつてんかな?みやは会つたんだろ?」

「……彼 実は 「

ピーンポーン

みやが何か言いかけていたが、それはチャイムによつて遮られた。

「噂をすればなんとやら、もう来たのか?」

「かもしだれないわね」

「ちよつと 行つてくる」

玄関に向かい

このドアを開けたら祐がいると考へると妙に気分が浮かれた。
俺達、互いに仲良かつたからな

ガチャン

「お久しぶりだね」

「えへっと、どちらさんでしょつか？」

優と思つて玄関のドアを開けてみれば、知らない女性の方がたつて
いた。

肩を軽く覆うくらいの黒髪のセミロング、モデル顔負けの華奢な体
つき

爽やかな笑顔はまるで天使を象徴するかの」とく、声もそれに釣り
合つかのように洗練されたものだった。

「私は『俺』って言つたほうがわかるかな?」

今時オレオレ詐欺ですか？しかも電話じゃなくて直接乗り込んでく
るといつ。

でもこんな綺麗な人が

「てい」

ガン！

急に後頭部に激痛が走った

「いってーーー！」

反射的に頭を押さえてうずくまる

後ろを見ればお盆を装備した、みやが立っていた。

「角で叩く」とないだろーーーみやーーー！」

「鼻を伸ばしている　　あんたが悪いのよ」

みやさん　　なんかとーーーても機嫌が悪そーに見えるのは氣の
せいですか？

「二人とも落ち着いて」

「あつ　優？　久しぶりね」

優？どこだ？

キヨロ　キヨロとあたりを見回すが何処にもいない

「どー見てんのよ　前　前」

「久しぶりー祭」

前？前には手をパタパタと振っている女性しかいないが、それがなにか？

「あんた
馬鹿」

はあゝ頭を押さえてため息をついているようだが、俺に取つて意味が分からぬ

「前居るのが優よ
その女性が優なの！」

גנום נאכט

「クククと頷くきれいな女性

なりほどこの綺麗な少女が優か……

なつとく

あまりの大きさに優(?)とみやは耳を押さえていた

「つてことは 男の優が君で 君があの優で
男だつたはずで……なら君は誰？」

ガン！

「ぬおおおあ痛つて～」

「うよつとは落ち着きなさい」

美ハの方をみると、冷たい目線で「さうを見てきた

「はい」

「優 狹いけど中入つてちょうだい」

「おじやましま～す」

「どうぞ どうぞ 狹いけど気にしないで

そのまま美ハと優は家の中へ入つていった。

俺一人玄関に残されているわけだが

つて ここ俺んちだがな！！

始まりは唐突に？（後書き）

この小説を書くにいたつては氣分です。
あしからず

少しでもみなさんにはんでいただけたらなーと思つてます。

今やせすだに…

先のやり取りのあと 家の中へ入った俺たち一向

マジマジと観るが本当に優なのか?

目の前にいるのは美少女。

それにあいつは男だったはずだが…

「ゴクッ…

胸なんかとく」…

「祭 ジロジロ観すぞ!」

『気が付けば觀耶が軽蔑の目線で此方を見ていた。

「本当 嘿つていやらしげわね~」

「ち、違うぞ

ただ見ていただけだ」

そうだ そうだ

「あはは はは あまり気にしてないからいいよ…」

と言いつつも顔は少し朱がをしていた。

「で 本当に優なのか？」

「そうだよ」

俺の問掛けに「クリと頷く

「でも お前 昔は男だったじゃ

」

「ストップ！ そこからは私が話すわ」

俺が全てをいい終わる前に美ハみやに規制された

「優はね 実は女の子だったの

「どう」と？

「見掛け（外見上）は男の子だったけど、内面つまり性別的には女子だったてわけ

…… そうなのか？

「今までそのための手術をするために越していくこと

美ハが優の方にチラツと目線を送る。

黙つて「クリと優は頷いた。

「じゃあ

優は女の子だったってことなのか…

しかし、こんなに綺麗になつて帰つてくれるとな……」

改めてみると

顔は整つてござり、

顔は整っており、多少は昔の面影があるか……
どこからどうみてもモデル負けの姿だった。

「あまり褒めないでね」

その、まだなれてないから…」

そうやつて恥ずかしがるところなんて……

「祭
誕
」

「あ」

うわ！汚ね！しかも恥ずかしい！

דָּבָרִים

な、
なんだ？

「へえ」

わたくしの前

いえ、わたくしがいのに良くそんな醜態みせられたるわね~」

「アーニー」とした観耶がこちらを見ていた。

観耶さを顔は笑つて いるけど、目が…

その、笑ってませんよ？

「ま、待て！俺は何もしていないぞ。な、なあ？優

「え？ええ、そうだね」

急に振られたからなのか、優まで慌てている。

「あははは、問題解決 一件落着」

「あははは 何が『問題解決 一件落着』よーーー！」

ぶおん！！

会話の終わりとともに、物凄いスピードのボディブロ が炸裂した。

そんなのを喰らった俺は意識を保つていられるわけなく、

「み、美ハ
又腕を上げたな…」

そのまま、地面に蹲り意識は闇の底へと沈でゆく…

「み、美ハ？」

そんなことして大丈夫なの？」

「これくらいじゃ死なないわよ

「泡吹いているけど?」

「……」

「美八のそういう所は、昔から変わらないね」

「ふん、まつとこしてよー。」

今までのところ（後書き）

最近寒々と想える日々で…
引きもつがちなつこのじみ

紹介でしょうか？

「始めてまして 神花 祐 と申します」

ちよつとした自己紹介と共に一人の少女が挨拶をした。

姿勢正しく礼をする姿はどこか清楚だった。

学校が始まり、

只今、朝のＨＲの途中なのだ。

昨日、俺が意識を取り戻した後祐も同じ学校に転入することが発覚（元々入るつもりで帰ってきた）し、偶然にも同じクラスになつたのだ。

「祭 何考えていらっしゃるのかしら？」

もちろん観耶も一緒に…

実は、裏でこいつの力でも働いているんじゃないかな？

校長を脅したり、校長を脅したりとか、校長を脅したりとか、etc

「祭？ すじく変なこと考えていませんか？」

「い、いえ めつそつむけられません」

昔からの付き合いは

考えまでも見抜いてしまつやつかいだ。

いや恐ろじこ。

「…あなたは顔に出やすいよ」

なんだと？そんなわけないな

「…お前ほどでわないわ（ボソリ）」

「なんですか！？」

俺が言つたことが氣にくわないいらしく
勢い良く立ち上がる觀耶

てかよく聞けえたな…

そのせいか、椅子が後ろにぶつかり觀耶の後ろでは凄いことになつ
ていた。

「つぎや～～！」

「夢藤～！」

「あの筋肉質なアメフト部の夢藤が吹っ飛ばされたぞー。」

「い、いや～！」

まあ、そんな感じだ

それにしても囁いた筈なのに、どうして聞こえるんだよ

「ヤニの一人とも！」

イチャイチャしないで黙りなさい！周りにも迷惑かかってるのよ

担任の千晴先生が注意してきた。

御もつともですか？、イチャついてはいません

「ああん？」

小さく子供がいたら 即泣きの形相でにらみつける 美八

美八さん その…
仮にも担任ですよ？

なにガンつけてらっしゃるのでしじょうか

「ひつい……」

ほら先生もビビッてるし
もう田がウルウルしてるし今にも泣きそうだな……

「…………まあいいですか」

流石の觀耶も担任にはさか「ひつい」とをやめ素直に席に着いた。

「うひうひ……」

ああ……

千晴先生もう崩壊寸前だな……

「先生泣かないで……！」

「がんばれ……！」

もう生徒から励まされる始末

それがこうをそうしたか

涙を自分の袖で拭いて崩壊を建て直した。

パツと見教師に見えないモンな…… 千晴ちゃん……

俺なんか 最初 小学生が高校に居るー? とか思つたし

「 であるから、みなさん

本日から花神 祐さんと宣しくやつてくださいね

「 はい 」

ここは幼稚園かよ

時は昼食放課の最中

「 ねえ 祐さん 僕とお昼でも 」

「 いめんなさい 」

「 なら僕と 」

「 いめんなさい 」

先ほどから祐の周りには男共が群れをなして集まつてあり、ピリカセ
ら断るの精一杯らしく飯を食つ暇がないようだ

「 なあ、祭

お前 アイツの知り合いなんだろ? 」

パンを食べながら語り掛けてくる一人の男、名は「恭介」
何かと良く昼は一緒に食べる

「 まあな 」

「あんな美人が祭の知り合いにいたとわね～」

「祐は男だったからね～」なんて言えるはずもなく、「あはは」と笑い顔で誤魔化した。

まあ、優里は正直かなりかわいいというより綺麗な女性に入ると思う。

そんじょそここの男ならほつとくはずがない。

俺は優里の状況を見てため息を軽く吐いた。

「俺も行きたい」じゃなくて

優里の困った顔にだ

仕方ないか…

「じめん 恭介 ちょっと用事が

」

「行つてこいよ」

なにかニヤッとしていたのは気のせいかな？
いや違うな。恭介はやたらと勘が鋭いからな。

「また 何か奢るよ」と言い、俺は男達の森に向かつ。

後ろでは「玉碎していい」などと聞こえたが、恭介のやつ、後でおぼえてやがれ…

「「めんぢゅつとー」

男達の森に割り込み祐の前に行く

「じゃあ、行こつか

祐の手を取り颯爽とこの場を去った。

後ろの方では、又しても
こんなに声が聞こえてきた。

「花神わ～～ん」

ムシムシ

「くつそー・またしても祭かーー！」

ムシムシ

「幼馴染みに觀耶さんといつものがありながら…」

ピタ

俺は瞬時にそいつを言つたやつの前まで行き（高速）、右ストレートをおみまいしてやつた。

「ぐはああああ

「ににー？またしても、筋肉質なアメフト部の夢藤が吹っ飛ばされたぞ！」

皆のもの出合え～出合え～」

何時の時代だよ…

「戦場に散つた、夢藤の弔い合戦、じやー」

いや、死んでないって…

「　「　「つむねおおおおー！　！」」

気が付けば男子一同、摘とかしていた

なんでだ！？

「祐ー逃げるぞー！」

「はー？」

俺は問答無用に祐の手を取り走った

* * *

「…！」今まで来れば大丈夫だろ…」

「… そうだね」

皆に終われ、屋上まで逃げてきた俺と祐

「そういえば、お礼まだよね
さつきは、ありがとう」

「いや 良いって」

あのまま 見てみぬフリなんて出来ないからな

「でも本当ありがと」

華麗な笑顔でいう姿は天使みたいだった。

よくよく考えると

今、屋上で俺と祐の一人きりなんだよな?
しかもベンチに寄り添つて隣座りだし..
昔は男だといっても今は女の子なんだしな..

まあ、いいか

「しかし 祐はモテるよな…」

「あはは まあね」

苦笑い気味に答える祐

ただ祐を誘つただけでアレだし

「でも祭ほび、ではないよ」

「俺か？このかた告白された回数も0なのにか？」

「ないない」

「えー？ うん？」

俺の返答に驚いたらしく、祐は目を丸くしていた。

「あのな～ それは 僕に対する嫌味か？」

「ち、違つよ～

祭ならすでに付き合つている人でもいるのかと……」

「ないない

今まで一度もそんなことないな」

返答しつつパンを一かじりモグモグ

うん、うまい

「そ、そつか～」

何やら祐の顔が「機嫌に見えるのは気のせいか？」

そのまま談笑を軽くし、昼放課も終わりが近づいてきた。

「よし～ やるやうに行く

ト、ト、ト、ト、ト、ト、ト

なんだここの轟を畜生か?

ト、ト、ト、ト、ト、ト、ト

だんだんと近付いていいのか?

ト、ト、ト、ト、ト、ト、ト、ト

俺の直感がこの場は、ヤバいと告げている。

「祐！　早くここの場

」

「ふえ？」

祐はまだベンチに座っていた。

バタン！

勢い良くドアが開いた

「（ば、馬鹿な！　誰も入れないように力ギギは閉めたはずだ…）

」

「祭！　美女と二人きりで屋上で昼食とはーなによー…」

開いたドアの前には、美八が鬼の形相で立っていた。

「違う！ 良くみろー祐だー！」

「ふつふつふ…」

だめだ怒りで我を忘れている。

目が攻撃色で真っ赤とかしてゐる…

このまま行くと觀耶に殴られ俺失神のパターンだな…
どうする俺？
どうする…

1・話間で何とかする

2・逃げる

3・諦める

4・觀耶に戦いを挑む

4は明らかに自殺行為だな…

1もダメ、3はやだな…
ならば、2か！

しかし、ドアの前には觀耶が
仕方ない。アレをやるか

狙いは俺だ… ゆうはまつて置いても大丈夫だろう

「観耶！あんなところに…」

空に向かって指を指す

つられて観耶も空を向く

「（じめたー）」

俺はこのスキを見逃さず
観耶の側を全力走で過ぎる

「（おっしゃーー）」

そう勝利に満つたのも束の間

いや、通り過ぎたはずだ…

何で目の前にいるのだ？

まさか 縮地？

近代にそのような術ができるものがまだ居たとは…

……神様、どうしてしょうが？

心の中で聞いてみる

無理！…諦めろ…！

即効で返信されてきた。

俺も男だ腹をくくらひ
祐さん…後は頼みます…

「祭り…」

その罵声とともに やつの拳が風を切る音とともに迫ってきた

渾身の一撃とは、まさにこんなやつなのでしょうか？

「……………」

またしても視界は暗闇へとすべられ

その後
気が付いたのは放課後の保健室でした。

紹介でしょうか？（後書き）

あれよあれよと時間が過ぎてます。
これでいいのか？と思つ始末
このごろおどぎです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496b/>

S & H 青い鳥

2010年12月14日18時18分発行